

新美術
時評
近藤誠一

久しぶりのニューヨーク。街にあふれるダイナミズム。何がそれを作り出すのか。「個人」の「自由」だ。その自由が街の喧噪を生み、麻薬や銃への寛容さをもたらすとしても、個人が自由に活動できるプラスは無限に大きいから、社会は厳しく制限しない。

そのような中で世界一周の途次NYに立ち寄った日本の豪華客船の船内で、日本の伝統文化を紹介するイベントをやった。時絵と小鼓それぞれ人間国宝との鼎談だ。時絵の細密画のような筆さばきの動画や、小鼓の親子の稽古の公開レッスン、そして観客全員が手で鼓を打つしぐさをやるAir Tsuzumiを交えたトークをやった。

テーマは日本人の自然観と和の精神の価値に絞った。工芸

品は自然素材からつくり、その性質を最大に生かすため、素材の言うことをよく聞く。作ったものは大切に使い、壊れたら捨てずに修復をして使い続ける。鼎談で使った鼓は400年前につくられたものだ。修復ができなくなったら土に返す。プラスチック製の工場製品との違いは明らかだ。

また工芸品は作家がひとつひとつ手で、想いを込めてつくり、使い手もその作品を手にする。ここで作家のメッセージを受け取る。作品を生活用品として日々使うことで心と心のメッセージのつなぎ役となる。これも工業

製品との違いだ。

反応は良かった。アメリカ人は美演や体験を好むと言われるがその通りだった。でも手放しでは喜べない。これからも同じことを続けられ良いという訳ではないからだ。

第一に観客の半分以上が日本人または日系人だったことだ。

文化交流はどのくらいまで

深められるか

日本の伝統文化の一流の演技や話を聞く機会はNYといえどもそれほど頻繁にはない。だから喜んで頂いたのは当然だ。でもそれは日米文化交流と言えるのだろうか。実はこれは対外文化広報の古くて新しい課題なのだ。

第二に、米国人が関心をもったとしても、日本文化の真髄をどこまで咀嚼したかは分からないからだ。

米国とりわけNYには多数の大手の日本の伝統工芸や浮世絵などの収集家がいる。彼らは収集品にわれわれ日本人と同じ価値を見いだしているのだろうか。

か。何人かの日本の工芸品収集家に会った。

ある有名な女性の陶芸収集家は言った。日本の伝統工芸は用途性functionalityつまり使うものであることに拘り過ぎる。土を使ったアートとして用途性を忘れてのびのびとオブジェを創作すれば、その創造力と技術がもっと世界に評価される。自分はそのような作品を集め、作家たちを支援していると。また浮世絵の収集家は、古いものばかり並べるのでなく、個人の嗜好に合ったものや、異質なものと並べて展示すれば、新鮮さを感じて自分から入ってくることを述べた。「日本の伝統工芸は、自然に優し〜、人の心をつなぐ社会的価値があるのだ」と口説いても米国人は関心をもたない。

米国人が「個人」の「自由」がもつ力を尊ぶのはアートでも同じなのだ。今後日本の伝統文化を米国に、そして世界に広げるには、日本人が価値と考えるもの(SDGsに合うとか、精神性など)をあくまで正面から主張することに拘るべきではないのかも知れない。

でもそれでは日本の伝統文化の真髄がいつの間にか失われてしまつのではないか。完全に分かり合えないことが、多様なのかも知れない……。今後の日米文化交流をどうすれば深められるかを考えるに当たって大きな課題だと感じた。

(近藤文化・外交研究所代表)